



Title	片岡さんと六郷さんの問いかけに応答する
Author(s)	奥田, 太郎
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2024, 6, p. 100-104
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/94566
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

特集2 第10回臨床哲学フォーラム（シリーズ：あたらしい倫理学）
テーマ「哲学に「臨床」は必要か？」

片岡さんと六郷さんの問いかけに応答する

奥田 太郎

2023年6月28日、大阪大学豊中キャンパス CO デザインスタジオにて開催された第10回臨床哲学フォーラムでの私の講演「哲学に「臨床」は必要か？」に対して、大阪大学大学院臨床哲学研究室博士前期課程の片岡花菜さんと六郷颯志さんからコメントをいただきました。その場でも応答しましたが、それについては当日のライブ感の中に置いておくことにして、ここでは、改めてお二人のコメントペーパーを読み直して考えたことを書いてみたいと思います。

片岡さんのコメントへの応答

臨床哲学に向き合う真摯な姿勢からのご指摘、ありがとうございます。私がかねがね、哲学的思考には同時に本格的な方法論への問いが並走していなければならない、と考えてきましたので、博士前期課程の時点で、自らが依拠する方法論への反省をきちんと言語化しておられるコメントに接して、実に心強く感じています。

片岡さんのコメントで述べられた、臨床哲学研究室で触れている「臨床」では、「問題だとみなされることに抵抗する声をくみ取る」ことが行なわれている、というご指摘は、とても興味深く受け取りました。己の人生を生きる人物に対して、哲学者も含めたその人生の外側にいる者が自分の枠組みを用いて、その人物の行為や生き方に本人の望まない「問題」をみいだすことそれ自体を批判的に問い直すことに、臨床哲学の役割を見出し、そうした人物とともに考える営みとしての臨床哲学が示されました。「問題をベースとしない研究」という哲学のあり方も印象的でした。

もしかすると、私は、問題から何かを考えるバイアスに囚われているのかもしれませんが。というのは、それが研究である以上、最終的に何らかの問題に関わらないものがありうるということが想像できないからです。たとえば、片岡さんの場合は、メンヘラをテーマに選んでおられますが、どうして他のものではなくメンヘラが選ばれたのかを説明する際に、何らかの問題の所在が予感のレベルであれ捉えられていたからだという以外の答えはあるか、気になります。「生き抜く本人」を中心に据えるという場合でも、なぜその人なのかを説明する際には、同様の仕方では答えざるを得ないように思われるのです。仮に、何となくその人の傍にいて、何となく考えているだけだとすれば、それは後に研究として自覚されることになる潜在的な何かだとしても、その時点で研究だと言ってよいのでしょうか。言えるような

気もしますが、そうした状態はおそらくほとんどの人生において遍在していますから、そうになると、片岡さんが取り組んでいるものが、それとは異なる臨床哲学の研究だと言えるのはなぜなのかが気になります。メンヘラをめぐる臨床哲学に片岡さんが取り組んでいるときには、「つかみどころのないメンヘラたちの有り様をどのように受け止めるべきか」という「問題」がそこに立ち現れているからこそ、片岡さんにとって、そこが哲学の「臨床」たりえているように私には思えます。その際、「どのように」を明示しないまま先送りする、という姿勢を是とするとしたら、それはそれとして、当の「問題」に対する一つの「解決」になっているように思います。そして、その「問題」は、第一義的には、「そこにいる人びとにとっての問題」なのではなく、片岡さんという哲学者にとっての問題であるようにも思えます。要するに、私が「「応用」の先の問題」といった仕方で述べている「問題」は、「それは由々しき問題だ」といった語りによって切り取られるような出来合いの社会問題に尽きるものではなく、何かを思考の対象とする際に必然的に立ち上がってしまう、哲学的思考の輪郭を規定する「問題」のことです。そして、私の主張の核心は、そうした「問題」はどこまで行っても「そこにいる人びとにとっての問題」にそのまま重なることはない、という点にあります。もちろん、この点をあえて宙吊りにして曖昧なままにおくことで生まれてくる豊かな洞察がありうることを否定するものではありません。ただ、そのギリギリの線を歩み続けるには、いったんそうした問題の重なり具合について厳しく考えておくことが必要だとは思っています。

というわけで、片岡さんのコメントで提示された 2 つ目の質問にまず応える形になりました。〈問題を中心に据えない「臨床」はありえるのか〉という問いに対しては、中心に据えるか据えないかは、探究のプロセスのどの段階でどのようにするかということであり、それとは独立に、「臨床」ということを語るのであれば必ず、その「臨床」を象る「問題」が何らかの仕方で立ち上がってしまっている、と回答したいと思います。そこが「臨床」になることがまったくわからないまま、ある人物とともに考えることはありうるでしょう。しかし、そこが「臨床」であったと判明した時には、探究者の側で何らかの「問題」が認識されているはずで、片岡さんの 2 つ目の質問は、〈問いのない哲学は可能か〉という問いと似ており、私の答えは現在のところ、その意味では「No」ということになります。

このことは、片岡さんの 1 つ目の質問にも関わっています。〈奥田の言う「当事者であること」と、臨床哲学の言う「(当事者とされる) 渦中にある人」はどう違うのか〉という問いですが、私の提示した当事者性マトリクスに位置づけるなら、「渦中にある人」は「当事者」に含まれます。なぜなら、「渦中にある」のは、私ではなく他ならぬその人であるからです。そして、「問題である、と何となく自覚していても、本人たちがその問題から脱したくない」のであれば、やはり、そのことは「渦中にある人」の「当事」であって、私の「当事」ではないのです。さらに言えば、「本人たちがその問題から脱したくない」ことについてその人物自身が掘り下げて考えている場合、そう考えている当人は、思考の主体としては「非当事者」という位置づけを得ることになります。つまり、そうした人物は、「渦中にある」とい

う点で「当事者」であるが、そのことを思考の対象として自分から引き剥がそうとしている点で「非当事者」である、ということになり、それゆえに、その人物を理解しようとする人にとってその人物を「当事者と表現することは少し難しい」という感覚が生まれる、と私なら説明するでしょう。そしてまた、そのような感覚を抱きながらその人物に対して臨床哲学者として関わる人（「非当事者」）にとって、その感覚は「非当事者的当事」だということになります。

臨床哲学では「問題を通して人と関わることに重きを置いている」、という指摘はとても重要だと思います。その際、人として以上の関わり、つまり、哲学者としての関わりが為されているのであれば、一度、当事者性マトリクスを用いて自らの立ち位置を整理してみることは、一定程度の有効性をもつのではないかと思っています。

六郷さんのコメントへの応答

六郷さんからのコメントは、まさに、片岡さんのコメントで出されたパスを受けて、さらにそれをゴールへ蹴り込むような連携感のあるものだと思います。博士前期課程の時点で自らが行なっていることに対する反省がきちんと言語化できているという点では、片岡さんと同じく、六郷さんにも心強さを感じております。

まず、六郷さんが規定して下さった私自身の応用倫理学者あるいは哲学者としてのスタンスは、まさにご指摘の通りです。これまで私が使用してきたのとは違う語彙を用いるなら、事柄に対する適切なディタッチメントが哲学者には倫理的に要請されている、といった言い方もできるかと思います。それに対して、六郷さんが自身のスタンスとして開陳して下さったもの、すなわち、個人的な共感を根本的な動機として、向き合う他者の生やテキストに自らを「託して語る」というスタンスは、実は、日本における伝統的な哲学研究のスタイルの一系統であるという印象を受けました。それはいわば、文学としての哲学を臨床哲学として遂行するという事だだと思います。そのアプローチは、おそらく哲学を豊かにする一助となるでしょう。

そうしたいわば一人称的な哲学探究のあり方について、当事者性マトリクスを用いると、「当事者的当事」、「当事者的他事」、「非当事者的当事」、「非当事者的他事」といった複数の視点を一人の人間が行き来する」こととして整理できるのではないか、という六郷さんの指摘は、当を得たものだと思います。これは、六郷さんの一つ目の質問に関連することです。

〈倫理学者には、非当事者的当事に限らず、マトリクスの中を縦横に行き来する、複数の立場が重なり合うあり方を生きる者がおり、むしろそうしたあり方こそが人間として現実的ではないか〉という問いかけですが、まさにその通りだと思います。倫理学者も人間ですので、人間としての現実には、当事者と非当事者、あるいは、当事と他事が互いに重なり合ったものであることは間違いありません。しかしながら、問題は、倫理学者として倫理学の「応用」を試みるとき、あるいは、臨床哲学者として哲学の「臨床」を求めるときに、そうした

重なり合いをほぐすことなく前提とすることは、果たして望ましいのか、ということです。もちろん、私は、それは望ましくないと考えているわけです。私の関心は、重なり合っているか否かではなく、重なり合いの事実を前提とした上で、当事者性マトリクスに位置づけられたどの要素がどの要素といかなる場合にどのように関わっているのかを明示することにあります。その意味では、六郷さんのご指摘が、マトリクスに分ける必要がないというものではなく、マトリクスの各象限を「行き来する」というものであった点に、我が意を得たりといった気持ちを抱いております。

二つ目の質問に移りましょう。私の示す哲学者像が、目の前の試合に対して呻吟する「客席の名もないサポーター」であるのに対して、六郷さんは、そうしたサポーターであることをやめて、「とにかくまず「私は〇〇といます」と名乗り出ることから始める」という「一人称的な誠実さ」を提案しています。さらには、そうすることで、「理詰めで得られる知識とは別種の「生きられている確かさ」を哲学的に捉えるべく、臨床哲学に携わっている、と述べています。そして、そのように「常に「臨床」(現場)に立脚することで自己の依拠する制度や方法論自体が破綻する可能性を受け入れる「覚悟」のありようを説いています。こうしたアプローチで哲学をすることは、哲学という営み全体を豊かにすると思っております。

ただ、私が気になるのは、やはり、「臨床」(現場)とそこに赴く哲学者との重なり合わない部分です。私の示した、「思慮ある傍観者」として自らの特権性や「大きなお世話」構造を引き受ける「覚悟」は、適切なディタッチメントを保持するという研究者としての責任を担うものであったわけですが、六郷さんの示した、自己の依拠する制度や方法論自体の破綻を引き受ける「覚悟」は、何者としての責任を担うものなのでしょうか。「一人称的な誠実さ」は時に、三人称的な不誠実に転じてしまわないのでしょうか。そのことを考えるうえで、当事者性マトリクスの当事者的当事と非当事者的当事の架橋可能性を問うことは不可欠だ、というのが私の見解です。もっと言えば、哲学者として三人称的な誠実さを示すことで、むしろ自身の依拠する制度や方法論自体の無力さや綻びが不可避的な形で浮かび上がり、それでもなお語り続けなければならないという「覚悟」が伴われることになる、と私は考えています。「一人称的な誠実さ」だけで、語り続けることを引き受けることは可能なのでしょうか。私には、その道は、興味深く魅力的だが、とても困難であるように見えます。

とはいえ、文学としての哲学の可能性は、やはり探究され続けるべきものだと思います。それが実りある試みになるためにも、いったんは、当事者性マトリクスのダイナミズムの委細について、自らの実践に照らして考察していただきたいと思っております。

片岡さんと六郷さんからのコメントをじっくり咀嚼することで、私自身が提示した当事者性マトリクスの射程をより深く考察することができました。そしてまた、この思考の枠組みが、応用倫理学だけでなく、臨床哲学にも適用可能であることもわかりました。ただし、

臨床哲学のことを考えるときには、綺麗に四象限に収まらない委細を明らかにすることが肝要だろうと思います。臨床哲学研究室の若き知性たちが、日本の哲学をより豊かなものにしてくれることを楽しみにしております。また、対話の場に誘ってください。ありがとうございました。

(おくだ・たろう)